

とあるバレンタインの裏話  
～朱いロイヤル・チョコ  
コレートにおまじないを乗  
せて～

巳影樹生

春風の中、駆け寄る姿を見つめる。  
あのバレンタインで、僕が選んだ——

冬の朝の空気が、暖かな布団の中でまどろむ僕の首筋を撫でる。  
その首筋をどろりと熱い何かが伝い落ちた。  
首筋を走る熱に目を覚ますと、僕を見下ろす長い黒髪の少女が居た。  
少女は刃のようなもので僕の首筋を撫でている。  
目に見えない喉元から漂う甘い匂いが、僕の心臓を打ち鳴らす。

これは……チョコレート！

「学校に行くまで来ないと思った？バレンタインは零時から始まるのよ」  
少女は僕に馬乗りになっている。  
逃げようともがくも重心を制され、僕は両腕ごと体を足で挟まれ締めあげられている。  
「恥ずかしがっちゃって、可愛い。今日こそ受け取ってね、私の想い……」  
僕の首を撫でていた刃を咥え、口移しで渡そうと僕の顔に近づいてくる。

少女の体が前傾し——

重心がずれた！

すかさずベッドに面している壁を蹴り体を捻りながら少女の尻を両腕で掴んだ。  
「ひゃん！」。  
悲鳴と共に少女が力を緩め、バランスを崩した所をすかさず股下を潜り抜け、着替えの詰まった鞆を掴み、窓ガラスを突き破り外に脱出！  
空中で制服に着替えて着地すると、ネクタイを締めながら家を後にした。

学校への道を駆ける。

無数の少女達がチョコレートを垂れ流しながら倒れて居る。  
塀はケーキのスポンジのように穿たれ、道はチョコレートで塗りたくられていた。  
……あの少女は強い、これまで僕がどれだけ逃げても、僕を追い詰め、想いを突きつけてきた。  
立ちこめる甘い匂いにむせる。

僕は、誰の物でも無いんだ——

この先は十字路、カーブミラーを見るも人影は無い。

一気に走り抜けようと加速したその時、右手の民家の塀の上に何かが飛び出した！

上っ！？

チョコレートが塗られた食パンを啜えたオブの少女が、塀の上で構える！

その少女がよろめき――

乾いた銃声の残響と共に、塀の向こう側へと落ちた。

「危なかったな！」

少女と反対側の曲がり角から、チョコレートに染まった制服のコートを翻す一人の男子生徒が、花束を抱えて駆け寄ってきた。

その花束からはチョコレートの匂いが漂い、中には鈍く光るライフルの銃口が見える

「話は後だ！」

彼は同じ数少ない男子で、僕の唯一の親友。

親友は僕の手を引き、駆け出す。僕もつまづきながらも必死で走った。

誰もいない音楽室、ここで休戦時間の授業開始時間までバリケードを築き、過ごす事にした。

重いピアノで入り口を塞ぐと、その場にへたりこんだ。

息を整えながら咳込む僕の背中を、親友の手がさすってくれる。

いつも、こうして助けてくれる。

その手は僕の腰を掴むと、引き寄せてきた！

必死で離れようとするも、力では叶わない。

「……親友だと思っていたのに！」

「お前が誰かを選ぶなら、それでも良かった。けど、お前は誰も選ばなかった。俺はお前を親友だと思った事は一時も無かったんだぜ……」

近づいてくる唇から、チョコレートの匂いが漂って来る。

やられる！

——全てを爆風が吹き飛ばした。

吹き飛ばされた僕は壁にぶつかる。

耳鳴りが頭の中を塗り潰し、視界を煙が埋め尽くしている。

何が起きているのか把握しようと、煙の中で周りを見渡していると、再び爆音が響いた壁が吹き飛ばされたのか、風が流れ込み、チョコレートの煙をさらう。

そこには、入口に立つバイオリンケースを担いだ音楽の女教師と……

親友らしきチョコレートの固まりがあった。

「私の獲物に手を出すなら、男の子でも容赦しないわ」

バイオリンケースの前後から、甘い煙が流れている。

女教師は僕に近づくと、優しい目で僕を見下す。

「大丈夫よ、あなたは誰のものにもしない、私が導いてあげるのだから」

何を言っているのか耳鳴りで聞こえない僕の胸に、バイオリンケースが向けられる。

ここで僕は終わってしまうのか。

女教師はそのまま横に倒れた。

そのわき腹には、チョコレートが滲んでいる。

吹き飛ばされた壁のあった場所に振り向くと、朝日を背に長い髪をなびかせる人影が立っていた。

朝の、少女だ——

その手には親友の持っていた銃を仕込んだ花束が握られている。

今度こそ最後なのか。力無く天井を仰ぐ。

そんな僕の前に立つ少女。

「あなたは、何を望むの？」

「僕はただ、自分で選びたいんだ」

「なら……」

花束から銃が引き抜かれ、

「あなたが、選んで」

少女は僕に花束を差し出してきた——

その花束が宙を舞う、少女の体を何かが吹き飛ばした。

倒れていたはずの女教師が立ち上がり、バイオリンケースを振り抜いていた。

「防弾は大人の嗜みよ」

倒れ、むせる少女にバイオリンケースを向ける女教師。

僕はその背中にすがりつく！

「積極的に、なったのね」

その場に崩れ落ちる女教師。

その背中には、僕が拾った彼女のチョコレートが突き立っている。

倒れている少女に手を伸ばす。

彼女は、チョコレートにまみれた僕の手を取って立ちあがった。

ホームルームの鐘が鳴り響き、僕らの日常が始まる。